

Title	懐徳堂あれこれ
Author(s)	宇野, 新逸; 宇野, 要次
Citation	懐徳. 1984, 53, p. 98-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90634
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷徳堂あれこれ

宇野新逸 宇野要次

私が懷徳堂で吉田先生から素読を受けたのは大正十年前後であった。丁度中学校（今宮中学）に入学し、初めて漢文というものに接した頃からで、私の次に入替つて弟要次（同中学）が受講した。私事にわたって恐縮だが、私達の母は今でいう教育ママのはしりだった。以来約六十年経ているので、思い出の中にも誤っている所があると思うが、何卒御寛恕を乞う次第です。

私の家は当時松屋町筋内本町通の近くにあったので、懷徳堂に通うのは大変便利だった。本町通には市電が通っていて、聴講にこられる時に利用された方も多かったと思う。懷徳堂は旧博物館美術館等があった府有地の西北端の一角に、道をへだてて東横堀川に面して真黒い大きな建物があった。北側は豊後町に面し高さ約三メ

ートルの石垣が連なり、本町橋より懷徳堂に至る川沿いの土手には数本の柳があり、夏には蜻蛉、蟬が集って私達のよき遊場だった。本町橋話には冬になると広島より牡蠣船がきて、女の人が巧みに貝を割るのが珍しかった。この辺は商都大阪には珍しい静かな環境で絶好の勉強の地と言えた。私達素読を学んだ者は数人で、緋の着物にこくらの袴をはいて学校から帰ると、大文字論語等の大きな和綴の本を布呂敷に包み、テクテクと石垣に沿って小門をくぐった。事務所に来所を告げ、大きな講堂の一室で細長い机に向って腰をかけていると、やがて鼻下に髭をはやされた吉田先生がこられ、前週に習ったところを読まされる。一対一の授業だからごまかしはきかない。家で復習はしてきた心組だが、時々誤ったり詰ま

ることがある。すると先生は持っておられる細い竹笥で机をたたいて「もっと勉強せよ」と叱られたが、決してひどく恐い先生ではなかった。先生が大きな声で「子ノコト曰く……」と一句一句読まれると、私が後に続く。一日に三・四頁を教えて頂いた。孝経から孟子迄終って、五経にはいると、とてもむつかしくなった。やがて先生



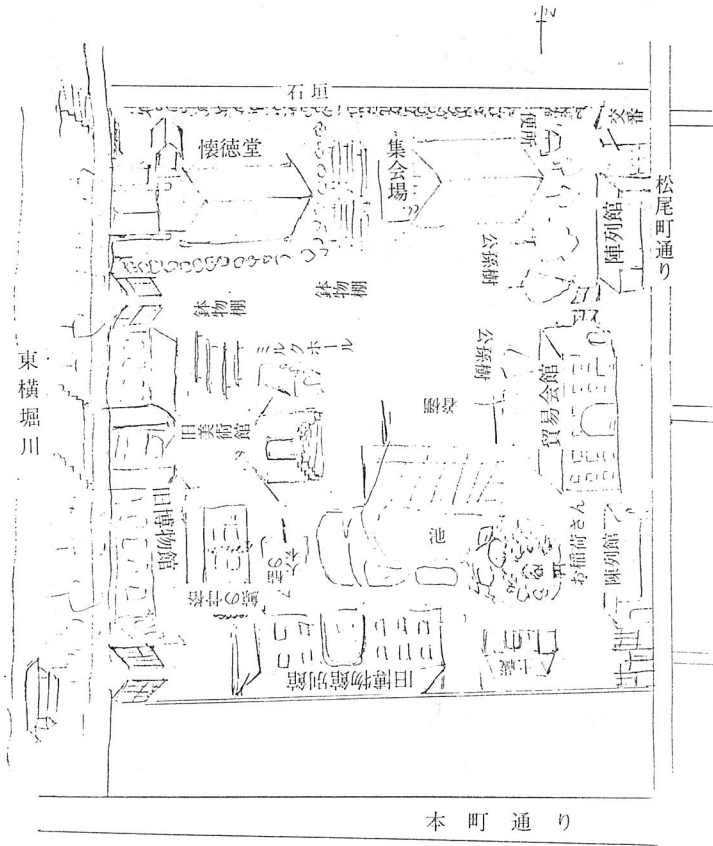
(重建懷徳堂講堂)

は文部省留學生として北京に行かれた。女の先生が後任として教えられた。当時の聴講生の方々では小松先生、野口さん、素読では野口氏令嬢、ミルクホールの伊吹さんの令嬢等が頭に残っている。黒い門の北隅には掲示板があり、西村天囚先生、内藤湖南先生等の授業の演題と日時が掲示されていた。やがて吉田先生が帰朝され又素読を受けたが、その時先生は私は「支那語（当時はその様に言った）を教えてやろうか、支那料理へ行っても便利だぞ」と親切に言われたが、学校の勉強と遊ぶことが忙しかった私は辞退した。今思えば惜しいことをしたと悔まれてならない。私も弟も中学四年になると素読を止めた。二人共一流の先生に個人教授を受けながら、勝手に止めてしまつて返す返すも惜しいことをしたと悔んでいる。難解の字句は先生から時々教えて頂いたが中学生の私等兄弟には理解出来難いことも多かった。読書百度意自通也。素読を通して私等の心の中に儒教の教えが培われたことは確かである。そしてこの教が私等兄弟の人間形成に知らず知らずの間に大きな作用をしていることも否めない。

懷徳堂は昔から大阪財界の絶大な後援を受けていました。私の通った時の理事長は住友の小倉正恒氏でした。

年に一度孔子祭があり、講堂で行われました。戦争の爆撃により懐しい懐徳堂は跡かたもなくなりました。島の内の陽明学の心学明誠舎の堂舎もなくなりました。大阪商人のど根性を正しく培った学問塾が二つ共失われたの

は淋しい限りです。余命少ない私は近頃「中庸徳之至者也」という語を座右の銘にしています。幸にして残った三万冊の蔵書が長く伝わることを祈ります。



(宇野新逸・要次画)